

特集 エコロジーと女性 part 2

ドイツの環境事情で感ずること

川合 真一郎

ドイツの環境事情をつぶさに見てくることは私の留学目的のもっとも中心的な部分で、ドイツ滞在の最後の2ヶ月を見学・視察に当てている。この原稿を書いている段階ではまだ見学すべきところのほんの一部を覗いたに過ぎない。ドイツのどこを見れば環境政策や環境事情を的確に把握しうるのは案外難しいことである。研究機関の見学や研究者との交流だけでも得るところは多々あるが、全体像を見るには程遠い。

昨年11月に今泉みね子氏の「ドイツを変えた10人の環境パイオニア」という書物が白水社から出版された。フライブルグに住み翻訳業、環境ジャーナリストとして活躍されている今泉さんに会ってみることにした。フライブルグはミュンヘンの西方約200kmのフランスおよびスイスとの国境に近いところに位置しており、人口20万人のうち3万人を学生が占める大学町でもある。町のシンボルである大聖堂のユニークな塔はヨーロッパのゴシック建築の傑作の一つに数えられている。100年以上経過している建物も多いらしいが、町並みが落ち着き、道路の敷石が実に細かく、町の真ん中에서도ごみが見当たらない。ドイツで1年のうちの日照時間ももっとも長い町といわれている。ドイツの南部であるだけでなく、とにかく町全体の日当たりが良いということなのであろう。フライブルグはこの数年間、「環境保護とエコロジー的都市開発」の分野でドイツの「環境首都」として評価されている。駅から町に出てまず驚くのは町中のいたるところに幅約40cm、深さ10cmほどの水路が張り巡らされており、きれいな水が勢いよく流れていることである。非常にさわやかな印象を受ける。京都の疏水の様だという人もいそうだが少し趣が違う。日本では市電が走っている都市は珍しくなってきたが、ヨーロッパの大都市は路面電車が当たり前であり、フライブルグのような小じんまりした町では交通手段として路面電車とバスがあれば十分である。車は町の外れにある無料駐車場に置くのが常識のようである。また、私の泊まったホテルでは市

電・バス乗り放題の乗車券を泊まり客に提供する（ホテル代に含まれているといえればそれまでであるが）。ドイツの環境事情について今泉さんはドイツ中を足で稼ぎ、いろいろな人たちとの出会いの素晴らしさを語ってくださった。今泉さんからこの町で見るべきところを3ヶ所紹介してもらった。環境教育に重要な役割を果たしているエコステーション、砂利を採取した後にできた水溜まりを近自然型の人工池にしたところ、そして太陽のエネルギーを最大限に利用して建築されたソーラーハウス（ヘリオトロープ）である。まずエコステーションであるが、市内の公園の中にちょっと奇妙な構造物がある。写真1のように、お椀を伏せたようなものの上に土がこんもりと盛られた格好をしている。中に入ってみると壁、床、天井は地元産のドイツウヒでできており、天井は丸太がそのまま組まれている。南側に太陽熱コレクターと太陽電池がセットされており使用電力の大半は自給しているそうである。このエコステーション、隣接した池そしてすぐ近くにあるビオガルテン（有機農園）を使って、環境をテーマにした講演会、エコ建築の無料相談会、野草の料理教室、子供ごみ教室、動植物の観察、野菜育て、巣箱作りなどの多彩なプログラムが幼児から大人までを対象にくり広げられている。ここを訪れたときは数人のスタッフが次の企画の準備中であつたが快く説明役を引き受けてくださった。自分の仕事に生きがいを感じている雰囲気がよく分かった。フライブルグに限らずドイツのいろいろな町で、環境に対する意識が非常に高いのはこのような地道な活動が根づいていることによるのではないと思われる。

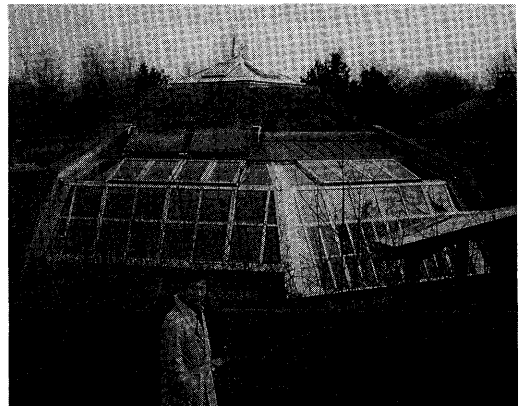


写真1：エコステーション

ソーラーハウスのヘリオトロープ（写真2）はぶどう畑の斜面の中腹にたっていた。これはフライブルグ市に事務所をおく建築家のロルフ・ディッシュさんの作品（実験住宅）で、太陽にあわせて1日に360度回転するソーラーハウスは壁面の太陽熱コレクターと屋根上の太陽電池パネルによって太陽のエネルギーを最大限に活用し、給湯、床暖房はもとよりこの家が消費する電力の5倍量を発電し、余剰電力は市のエネルギー供給事業所に売っている。このヘリオトロープを最初に見たときはおよそ“家”という概念からは程遠く、周辺の家並みからも遊離しており、すんなりとは受け入れ難いが、発想の転換が必要なのであろう。



写真2：ヘリオトロープ

エコステーションにしるヘリオトロープにしる、太陽エネルギーに対する執念、暖房の考え方が日本とドイツではかなり違うということを感じさせられる。最近では日本でもごみ焼却場での排熱利用やごみ発電など（これらをコジェネレーションという）に対する認識が高まり、実用化されているところも増加している。ドイツの場合このコジェネレーションに対する取り組みの徹底ぶりはすさまじいが、さらに大切なことは、焼却する前になすべきこととして Returnable, Reusable, Recycling を挙げ、日常的に実践していることである。“廃棄物ではなく、資源である”というコンセプトこそドイツから学ぶべきもっとも重要なところであるというのが私の現時点の結論であり、残された滞在期間をその検証にできるだけ当てようと考えている。（1998年2月15日、ミュンヘンにて）

（人間科学科教授）

『女と男』

金城盛紀

「言葉がのろいのは女の唯一のとりえ」。これはシェイクスピアの喜劇『ヴェローナの二紳士』に出てくる。ミルトンの『失樂園』では「彼は神のみに従い、彼女は彼の内なる神に従う」とあり、この男女の主従関係は、「コリントの信徒への手紙1」に基づく——「すべての男の頭かしらはキリスト、女の頭は男」。アメリカには woman, women は性差別語であるとして womon, womyn に書き換えるフェミニストもいるが、ミルトンは woeman すなわち「男にとって災い」を意味する綴り字を好んで使った。ピューリタンの大詩人は、悪魔にまんまとだまされたエバ（Eve）のことをイビル（Evil悪）の根源と言いたそうである。

しかし、救済主が生まれるのはエバの末裔マリアの腹からである。そのことを当のミルトンは強調する。エバがいなければ人間は原罪を犯すことなく、いつまでもエデンの園に安住できたであろう。しかしそれでも、キリストの生誕も、したがって信仰による「より幸いなる内なる樂園」を可能とする神の恩寵も、人間の新たな栄光も現実のものとはならない。エバの弱みは「神の慮おもいの正しきを明らかにする」ために役に立てられたのである。

「男に災いをもたらした女」は、シェイクスピアでも救いをもたらすヒロインとなる。私は、シェイクスピアの喜劇を「災いを転じて福となしたい」万人願望の投影とみる。権力の座にあり、力と知恵をもつ男たちがもたらす災いを福に逆転させるのがまさに女たちなのだ。例をあげるならば、『ヴェニス商人』のポーシア、『お気に召すまま』のロザリンド、『冬物語』のポーライナ。みな性格も境遇も異なるが、福女であることは共通する。彼女たちは饒舌ではないが、けっして言葉がのろいわけではない。ポーシアは情理を尽くした雄弁で悪党を退治する。ロザリンドは才気と現実感覚を言葉にして愛を全うし、浄化される社会の再出発を祝う。ポーライナは脇役だが、彼女の勇氣ある直諫と行動力が、破壊と死の現実を再生と調和のあらまほしき世界へと逆転させる。

このような女たちは素直でやさしい心の持ち主であることも共通する。イギリス・ルネサンスの文学は「災いとしての女」を「福をもたらす女」へと変容している。ルネサンスは女の再発見でもあったわけである。

（英文学教授）

『女と男』

〈同性愛〉／〈異性愛〉

—もうひとつの二項対立—

高橋友子

私がかつて教えていた大学に「同性愛者」の学生がいた。「同性愛者」という言葉は決して好ましくはないが、「レズビアン」「ゲイ」と書くと、この学生の性別が確定されてしまう。この学生は、一部の友人やゼミの担当者である私には自分が「同性愛者」であることを明らかにしているが、公にはカミング・アウトしていない。それゆえ、この学生の性別を特定しないために、あえて「同性愛者」と書くことにする。

この学生は、「ジェンダーと社会」という私のゼミで、一貫して同性愛者のリベレーションの理論を研究テーマとして取り上げていた。同じゼミの他の学生たちが「結婚」「夫婦別姓」「離婚」「母性」「性別役割分業」「買売春」といった、いわば〈女〉〈男〉の区別と異性愛の環境を自明の前提としたテーマを選択している中で、この学生は新鮮な感性を持つ際立った存在だった。たとえば、「結婚」がゼミ発表のテーマだったとき、この学生は、同性愛者の結婚・養子制度が外国でどのように認められてきているかといったコメントをする。「買売春」についても、「若い男に性欲がないとやばい、と思い込んでいる男自体が、〈男らしさ〉に囚われているのだ」と発言し、私の言いたいことをみな言ってくれれば、私は喜ばしくなった。

しかし、この学生が放つ新鮮な発言に刺激される一方で、私はまたゼミを指導する側として自分自身の発言をよりチェックしようとするようになった。ともすれば、無意識のうちに異性愛を「正常」「当然」とした視点で考え、語っているのではないかと。この学生が言っていた。「みんな、日本では同性愛者は差別されてないって言うんですよ。」確かに日本では、西洋のように同性愛者が宗教によって迫害されたり、法による取り締まりの対象となったりしたことはなかった。しかし、それだけに同性愛に対するバイアスは、より見えにくいものとなっているのではないかと。ジェンダー・スタディーズを教える者は、この問題にもっと敏感にならなければならないということを、私はこの学生から学んだのである。

(総合文化学科専任講師)

1997年度年間活動報告

I 講演会・報告会等 (*は連続企画)

特別講演会 1997年5月9日(金)

「子育てと文庫活動のなかから見つけた私の生き方」

講師：岩田美津子氏

(てんやく絵本「ふれあい文庫」代表)

[出席者：87名]

ビデオ上映会 ①1997年5月14日(水)

②1997年5月16日(金)

「鏡のない家に光あふれ—斉藤百合の生涯」

(製作：日本)

[出席者：計30名]

講演会 1997年5月26日(月)

*「エコロジーと女性」〈No.1〉

「有機塩素化合物がもたらしたもの

—レイチェル・カーソンからダイオキシンまで」

講師：福岡実氏

(大阪市立環境科学研究所生活衛生課研究主

任、本学非常勤講師：環境化学専攻)

[出席者：25名]

講演会 1997年6月19日(木)

*「エコロジーと女性」〈No.2〉

「母なる海と子なる魚達」

講師：中村泉氏

(京都大学農学部附属水産実験所助教授：魚

類学専攻)

[出席者：35名]

ビデオ上映会 1997年6月23日(月)

「ナムムの家—アジアで女性として生きるという

こと2」(製作：韓国)

[出席者：25名]

特別講演会 1997年7月9日(水)

「もうひとつの生き方

—もっと元気に生きるために」

講師：中西豊子氏

(ウイメンズブックストア松香堂代表)

[出席者：22名]

特別講演会 1997年10月21日(火)

“SHE WAS THE SUN OF MY LIFE” : an illustrated presentation of JANE AUSTEN and her life

講師：カリン・ファーナルド氏

(女優、著述家：英国)

[出席者：98名]

講演会 1997年11月10日(月)

*「エコロジーと女性」〈No.3〉

「女学院がもった生き物たち」

講師：野峯玲児氏

(神戸女学院大学人間科学部助教授：植物生

態学専攻)

[出席者：20名]



カリン・ファーナルド氏



野峯玲児氏

ビデオ上映会 ①1997年11月19日 (水)

②1997年11月21日 (金)

「私は男女平等を憲法に書いた」(製作:日本)

[出席者:計11名]

講演会 1997年11月28日 (金)

*「エコロジーと女性」〈No.4〉

「女としての自然」の収奪

—17世紀西ヨーロッパにおける自然観の変動—

講師:桜井徹氏

(神戸大学国際文化学部助教授:法哲学専攻)

[出席者:50名]

報告座談会 1997年12月9日 (火)

*「エコロジーと女性」〈No.5〉

「学内でのリサイクル活動への取り組みについて

—空き缶/牛乳パック・古紙のリサイクル—

講師:谷祝子氏(神戸女学院大学教授) &

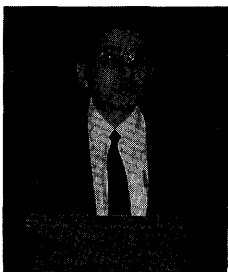
「やぎの会」学生(3名)

溝口聡子さん(〃人間科学科3回生)

豊木麻由さん(〃人間科学科3回生)

山田真紀子さん(〃人間科学科3回生)

[出席者:13名]



桜井徹氏



報告座談会

(右より谷氏、山田さん、豊木さん、溝口さん)

ビデオ上映会 1998年1月16日 (金)

「ナムムの家—アジアで女性として生きるということ

こと2」(製作:韓国)

[出席者:10名]

II 研究助成

「『青踏』の持つ歴史的意味の研究」

飯田祐子[総合文化学科・専任講師]

「『道成寺』の娘—その女性観の研究」

浜下昌宏[総合文化学科・教授]

「谷崎潤一郎と D.H.Lawrence, Forster における
(母恋い物)のテーマ」

平井雅子[英文学科・教授]

III 学会等出張補助

女性科学者の環境改善に関する懇談会 (JAICOWS)

定例総会(日本学術会議会議室・東京都:1998年
3月31日)に出席。

別府恵子[英文学科・教授]

IV 女性学講座 (科目名「現代女性論」)

1997年度は(1)・(2)コースとして前期・後期とも開
講された。

V 出版物

『女性学評論』第12号 特集:家族

(1998年3月発行)

「ニュースレター」No.23

(1997年10月発行)

「ニュースレター」No.24

(1998年3月発行)

VI AWIとの交流 (The Asian Women's Institute:

アジア女性研究所)

1997年度は特記事項なし。

VII その他

学生の活動に対する補助:「やぎの会」(環境問
題を考える会)の諸活動に対し支援を行った。

—移転のお知らせ—

女性学インスティテュートは本年4月より図書館
本館1F(東棟中庭側の2室)へ移転いたします。

図書の閲覧・貸出をご希望の方および返却される
方は上記までお越しく下さい。

なお、現在使用しているD-303は書庫となります。

1997年度女性学インスティテュート編集委員

別府恵子、風呂本淳子(委員長)、石川康宏、正木芳子、
孟真理(ABC順) 編集事務:豊福裕子

編集・発行:神戸女学院大学女性学インスティテュート

☎662-8505 西宮市岡田山4-1 ☎(0798)51-8545